

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報Ⅵ

平成13年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

奥山古墳群

奥山古墳群は、松江市上乃木10丁目の松江総合運動公園内に所在する。

調査地は運動公園内の北西に位置し、標高25m～35mの低丘陵が南北長約200mに渡り連なっている。ここは以前より「運動公園内古墳群」として周知されており、松江市教育委員会の試掘調査で9箇所の古墳推定地が確認されていた。

調査は最南端の1箇所を除く8箇所が、平成16年度に島根県を主会場に開催される全国高校総体に対応するためのテニスコート増設工事の範囲内に含まれることに伴い、平成12年12月4日から平成13年3月31日、平成13年4月9日から同年6月25日の期間実施したものである。

調査の結果、調査区南端に位置する標高30m余りの尾根上では南端より1号墳、2号墳を、調査区中央に位置する標高35mの尾根上では南端より3号墳、SX-01を検出した。さらに北に降り標高31.5mに4号墳を、標高28mに5号墳を、標高25mの尾根の先端に6号墳を検出した。このうち比較的依存状態の良かった1号墳、3号墳、5号墳は、出土遺物の年代観からいずれも古墳時代中期後半の築造と推測された。主体部が確認できたのは1号墳、2号墳、3号墳、5号墳の4基であった。いずれも木棺直葬と思われる。

以下に概要を記すこととする。

奥山1号墳は南北長6.4m、東西長推定5.6m、残存高0.5mの方墳であった。

墳丘は南北に上端幅1.4mの溝を掘り、尾根を切断し区画していた。

墓壙は長さ1.9m、幅約0.5m、深さ0.1mの長方形土壙であった。墳丘中央に旧表土面から掘り込まれており、主軸はN-44°-Wにとる。土層堆積状況より埋葬後、黄褐色土の盛土を施していることが確認されたが、盛土はかなり流失したものと見られ厚さ0.1m～0.2m程度であった。

墓壙内からの遺物は出土していないが、北側溝の墳丘寄りでは5世紀後半代の土師器の坏3個体出土した。いずれも口径10cm前後、器高5cm前後を測り、口縁の内湾する特徴が著しく、底～体部が丸みを帯びるものであった。坏は溝底にほぼ接し、3個体が並び置かれた状態で出土しており、埋葬時に溝内で葬送の祭祀が執り行われたことが窺われるものであった。

奥山2号墳は1号墳よりやや高まりを持ち、北側の標高差約3mと見晴らしの良い目立つ立地に築かれていた。盛土の流失により墳形は不明である。南裾はわずかにそれとわかる程度の起伏をなしており、北裾は降り尾根の地山を削平して幅4.5m、長さ2.0mの三日月状のテラスを造っていた。

墓壙は長さ2.6m、幅0.6m、深さ0.26mの長方形土壙であった。頂部地山面より掘り込まれており、主軸はN-30°-Wにとる。

出土遺物はなく時期は判断できないが、立地条件から1号墳より先に築かれたものと考えるのが自然ではないだろうか。

奥山3号墳は直径8.3m、高さ0.9mの円墳であった。墳丘の北側に溝を掘り南側を墓域として区画していた。

墳丘は旧表土面を直径7.5mの範囲で残し周囲を地山面まで削り込んで墳裾としていた。さらに削

り出た地山粘質土を旧表土上に盛り土し墳丘基盤としていた。埋葬後、若干の盛土を施していた。墓壙はこの盛り土上より掘り込まれ、築造当初は長さ2.2m以下、幅0.85m、深さ0.2mの長方形土壙であったと思われるが、北側半分は最大幅1.2m、深さ0.25mに渡り盗掘によるものか攪乱を受け埋め戻された痕跡が確認された。主軸はN-12°-Wにとる。

遺物は土壙検出面より数cm掘り下げたところで鉄剣1口、鉄鍬2本を出土した。鉄鍬の1本は鍬身



奥山古墳群遺構配置図

長3cm前後の片刃箭式の長頸式鎌であり5世紀後半代のものと考えられる。これらの遺物は供献品と思われ、棺側に置かれたものが木棺の腐朽とともに落ち込んだものと考えられる。

SX-01は残存長2.15m、残存幅0.35m、深さ0.1mを測る隅丸長方形の土壙であった。表土直下の地山から掘り込まれており、主軸をN-11°-Wにとる。3号墳と並ぶ最高所に立地していることから墓壙の可能性が高いと思われる。

奥山4号墳は直径7.5mの小円墳であった。墳丘南側に地山を切削加工した上端幅1.4m~1.7m、下端幅0.45m、深さ約0.3mの溝を検出した。溝の断面形は緩やかなU字形を呈し、両端は円弧状に少し回っていた。盛土、主体部、遺物とも確認できなかった為詳細は不明である。

奥山5号墳は南北長推定12mの方墳であったと思われる。墳丘の南側は、上端幅4.5m、下端幅2.8mの溝で尾根を切断し区画していた。東、北、西側は築造当初よりあまり手を加えず、見晴らしの良い自然地形を十分に活用したのと考えられた。

墳丘は頂部平坦面の旧表土を削り、地山面に粘性の黄橙色土を盛り土して平坦面を整形し墳丘基盤としていた。埋葬後は、類似する黄橙色土を盛り土し更に黄褐色土を盛り土したと思われる。

墓壙は墳丘基盤を整形した盛土上より掘り込まれ、長さ3.6m、幅約2.0m、深さ0.5mを測る二段掘りの長方形土壙であった。主軸はN-27°-Wにとる。内側の掘り込みは、長さ3.0m、幅約0.6m、深さ0.15mを測る。墓壙底部南側には枕石と思われる15cm~20cm程の石2個がL字状に組み合された状態で置かれており、頭位が南東に向けられていたことが推測された。

遺物は墓壙底面より鉄剣1口、鉄鎌1本、刀子1口、不明鉄器1個を、底部より20cm上層の墓壙内埋土より5世紀後半代の土師器の直口壺を1個体出土した。直口壺は埋葬後の供献土器と思われる。

6号墳は運動公園造成以前より既に墳丘の北側半分以上が削平されており、残丘部分のみの調査となった。そのため墳形は確かな判断がつかず、主体部も破壊されたものか確認できなかった。

土層堆積状況より古墳の盛土と思われる厚さ10cm~20cm程の黄褐色土が、東西径約11.0mに渡り旧表土直上に観察された。

墳裾は、北側に長さ5.2m、最大幅2.8mを測る半月状のテラスを造り、南側には上端幅4.5m、下端幅1.5m~2.4m、深さ約0.6mの溝を切っていた。

本古墳群周辺の遺跡には、県内でも傑出した規模の前方後円墳を持つ大角山古墳群や豊富な副葬品を有していた長砂古墳群など時代はやや古いが中期古墳の存在が明らかとなっている。本古墳群はこれらと比較すると墳丘規模、副葬品、供献品の質的、量的な観点から質素な趣を感じさせるものであった。おそらく本古墳群を形成する集団は、当地を掌握する豪族集団と主従関係にあり、農耕などを生産基盤として生活し累代的に営まれた小規模な地域集団であったのではないだろうか。そして運動公園造成以前の測量図によると、本古墳群の西側には、かなり広い谷の低地が広がっており、ここに生活基盤があったのではないかと想定された。今後、乃木地区における古墳時代中期の墓制の変遷が解明されるとともに、本古墳群を形成した人々の様相がより明らかになることを期待したい。

(広江 光洋)



奥山 3号墳



奥山 5号墳二段掘りの墓壙

大坪遺跡

大坪遺跡は、松江市山代町・大草町に所在する。

そこは松江市東部の意宇平野の西寄りの場所で、現在は水田として利用されている。調査区は真名井神社参道に沿って幅約12m、長さ約337mと南北に細長く、意宇平野西部をほぼ南北に断つ位置である。

発掘調査は平成11年度、12年度と実施しており、本年度が3年目である。

本年度の調査区は細長い大坪遺跡の中でも真名井神社寄りの8m×42mで、降雨が続くと溜池状となる水捌げが悪い低湿地である。平成12年度調査においては、遺構・遺物等が存在する可能性が低いと考えられたため、トレンチ調査を実施して土層観察のみにとどめる場所であった。ところが、トレンチ調査や一部拡張調査区において、灰白色粘土の古い基盤層や木製品の出土が確認されたため、全面発掘調査が必要となり、本年度の調査に至ったものである。

発掘調査の結果、調査区のほぼ中央では、意宇川の扇状地形成が始まる以前の基盤層、灰白色粘土層を南北16m幅にわたって確認した。灰白色粘土層の上面には所々に薄い砂層が見られたほか、葦類の植物遺体が多量に検出され、湿地となっていた様子がうかがわれた。古墳時代中期から後期を中心とする土器のほか、火キリ臼を含む木製品も多く出土した。精査をおこなったところ、幅の狭い小川状の自然河道2条を検出し、その堆積土中からは石鏃のほか土師器の高坏片等の遺物が出土した。最



調査区全景（北より）



灰白色粘土基盤層上の遺物出土状況

も新しい遺物としては古墳時代後期の須恵器、坏蓋が出土したことから、古墳時代後期には流れていたものと解釈できよう。

灰白色粘土基盤層の北端は河道によって浸食を受けており、地表面下2.5m掘り下げたレベルでは、人力ではとても動かさないような巨大な木の幹や根が絡み合った状態で出土した。周縁の巨大流木をも巻き込んで押し流した激しい河川の氾濫があったようである。そのような激流によって白色粘土の基盤層北端は浸食されたのであろう。巨大流木の下面砂礫層中からは弥生時代中期の土器がまとまって出土したほか、木製品も多く出土した。

灰白色粘土基盤層の南端も河道によって浸食を受けており、セクションでその様子を確認することができた。扇状地の扇端にあたるため、北側の旧河道と比べて地下からの湧水が著しく、掘り下げの深さは湧水砂層直上までとせざるをえなかった。湧水砂層上の沼地状堆積層、暗灰色粘質土層中からは弥生時代中期の土器や木製品が出土したが、その出土地点は灰白色粘土基盤層に近い場所に限られた。

以上のとおり、平成13年度の調査では遺構は検出されなかったが、意宇平野の扇状地形成以前の基盤層を確認し、それが浸食された状況や時期をセクションや出土遺物から推察することができた。今後、意宇平野とその周辺に存在する遺跡を語るうえで役立つ成果があったと考える。

(江川 幸子)

荒隈城跡（小十太郎地区）

荒隈城（小十太郎地区）は松江市国屋町に位置する。本地区は民間業者が住宅団地の造成工事を計画した際に、丘陵斜面に複数の加工段と頂上部に比較的広い平坦面があることが確認された。本地区の南側丘陵には荒隈城があり、本地区もその一部と思われた。

荒隈城は1562年（永禄5年）に安芸国（現在の広島県北部）の戦国大名毛利元就が出雲国の戦国大名尼子氏を攻めるための本陣として築かれた城である。毛利氏の配下の武将は丘陵づたいに陣屋を築いたとされ、その痕跡は所々見受けられる。しかしながら毛利氏による尼子攻めが終わると荒隈城は廃城となり、その後は江戸時代になって堀尾吉春が出雲に入国し本拠地を月山富田城から松江に移す際に候補地として挙げられただけであった。

荒隈城自体の発掘は1968年に島根県文化財愛護協会（報告書未刊）が、1980～81年に松江市教育委員会（1982年に報告書刊行）がそれぞれ行った。その際に掘立柱建物跡や曲輪跡が検出され、土師質土器（かわらけ）や輸入陶磁器などが出土している。

12年度の調査は荒隈城の中心とされる丘陵より約400mの北にある丘陵が小十太郎地区と呼ばれるところである。本地区では墓域と想定される東側調査区、屋敷跡と思われる北側調査区、城跡の痕跡が残っていると思われる頂上部調査区の3カ所に分けて調査を行った。

東側調査区は調査前の段階で平坦面に塚状に盛り上がったところが数カ所あった。調査区から外れたところには天保年間銘や享保年間銘の刻まれた墓石があり、本調査区もその墓域の一部ではないかと考えられた。調査の結果、墓壙を持つ塚を2基検出し、うち1基の墓壙から出土した遺物で近世末前後の遺構と考えられる。調査区内から近世末以降の陶磁器や土師質土器の破片が大量に出土した。

北側調査区は70～80年くらい前までは人が住んでいたらしく、調査前に井戸が3基確認されていた。調査の結果、南北約20m、東西約10mの平坦面から溝や土壙、石列などが検出した。溝は斜面と平坦面との境に作られ、区画を示したり、雨落溝の役目を持っていたと思われる。土壙は円形や隅丸方形の形状で10穴を検出した。なかには貝殻や炭といっしょに陶磁器や土師質土器の破片が出土する土壙もあり、ごみ穴として使用されていたと考えられる。石列ははっきりとした用途は不明だが屋敷に用いられたものと推測される。

屋敷跡についてははっきりと規模を示すような痕跡は確認できなかったが、礎石に使用したと思われる石がいくつか見られたことから、礎石建物であった可能性がある。本調査区も近世末から近代にかけての陶磁器や土師質土器の破片が大量に出土している。

頂上部調査区は予想されていた頂上部平坦面からは遺構は検出できなかった。畑等の耕作によって破壊・攪乱されていた。丘陵斜面東側からは等高線に沿うような形で加工段を上下2段検出し、それに伴う溝も検出した。おそらくは雨落溝の役目があったと思われる。土壙は3基検出し、うち1基は“こ炭焼き”の土壙であった。これらの遺構に時期に関しては、埋土からの出土遺物により近世末から近代に埋没したもので、作られた時期もそのぐらいの時期と思われる。

遺構については中世荒隈城に関係するものは確認できなかった。その代わりに近世の遺構が確認した。明確な確証はないが、もともと荒隈城に関係する遺構がありそれが近世の開発によって破壊されたのではないかと想像される。

遺物についてその大半が近世末から近代にかけてのものである。傾向として北側調査区では生活雑器がそのほとんどで、東側調査区ではその中に供膳具が含まれる。そして頂上部調査区になると出土遺物が他の2調査区に比べて極端に少なくなる。

今回出土した遺物は一般庶民が使っていたものであり、近世末から近代にかけての当時の生活を知る上で貴重な資料であることは間違いない。

(石川 崇)



頂上部調査区 加工段状遺構

法吉遺跡

調査経緯

法吉遺跡は松江市法吉町・春日町地内に位置する。13年度調査地は前年度調査に引き続き、市道東生馬線の道路拡張部の438m²にあたる。この調査区をI区とJ区に分けて順次、調査を行うことにした。

調査方法は前年度の調査方法に準じた。すなわち、各調査区は法面を40度に設定し掘削を行うが、包含層までは重機で掘削し、包含層は人力で掘削する。これは、遺跡地の地盤が極めて軟弱であり、調査上での安全を確保するための必要から生じたものである。

調査概要

調査区内の基本層序は盛土及び旧耕土がGL-1mまで続き、同層からは近現代の陶磁器類が数点出土した。この層の下には暗灰色系のシルト層（有機質含）が堆積する。包含層の厚みは調査地点によって10cm~50cmと幅が広く、更に3~5層に細分できる。出土土器は5世紀~10世紀まで混在するが、上層では7~10世紀の土器が主体を占めている感じを受けた。この包含層において面的調査を実施（上面）した所、若干の土壙と杭列を検出した。

上面の下、GL-1.5~2.5mで黒色有機質層や灰色粘土層が堆積する。同包含層は木製品（田下駄等）の残存が良好で、遺物も弥生~10世紀と幅が広い。そのため、木製品の明確な時期比定は困難であるが、出土土器に関していえば古墳末~古代の土器が量的に最も多く、木製品も大部分が同時期に属すると判断している。

GL-2.5m以下は灰色・オレンジ色砂層の堆積が認められた。出土遺物はない。砂層の薄い部



木製品出土状況

分では、GL-3m付近でオレンジ色シルトの地山層を確認したが、調査の安全を考慮して3m以上の掘削は断念し、全面にわたっては地山を検出できなかった。

調査成果

13年度調査地の出土遺物は細片が多いが、土器以外の木製品で貴重な知見が得られた。これはI区とJ区にまたがる沼状湿地（有機質シルト～粘質土）を中心として出土しており、器種的に田下駄、木錘、斎串？などを確認した他、多数の板状木製品を含んでいる。

遺構面では弥生（以前）～10世紀において立木や自然木が堆積する沼状湿地が広がっていたことが明らかになった。『風土記』の鳥根郡の条には、「法吉の坡。周り五里(2.7km)、深さ七尺許(2.1m)。鴛鴦・鳧・鴨・鮒・須我毛有り。夏の節に当たりて、尤も美き菜有り。」との記述が見え（荻原千鶴1999『出雲国風土記』講談社）、現在の黒田・法吉・春日一帯には古代において大きな池が広がり、カモやオシドリなど水鳥が群がっていた状況が描かれている。本年度の調査成果によれば、当地が軟弱な低湿地の一部であったことは明らかである。

この沼状低湿地から打製石鋏、弥生土器片、磨製石器、黒曜石・サヌカイト剥片類が僅かながら出土している。5～6世紀の土師器・須恵器も一定量出土し、7～8世紀の須恵器が比較的多い。最も新しいものは9～10世紀の底部糸切による須恵器が出土した。これらの状況から、本年度の沼状湿地は古く弥生（以前）に遡り、古墳末～8世紀には遺物が多量に放棄され、以後10世紀頃に最終的に埋没したものと考えることができる。

J区の上層では中・近世の杭列が検出されており、層位的にはその上に近・現代の灰色旧耕土、及び盛土が堆積する。そのため、沼状湿地が埋没した10世紀以後は水田として利用され現在に及んでいるものと判断できる。

（藤原 哲）



J区下層 沼状湿地検出状況

山津窯跡

山津窯跡は、松江市大井町に所在する。

県道本庄福富松江線大海崎工区（大井）道路改良工事に伴い、松江市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認された為、本調査を実施することとなった。

13年度は、山津窯跡とされる場所から200～300m西側の水田部分の調査を行った。調査地は、旧地形上では和久羅山、高山から派生する谷地形に立地している。中海北岸に点在する古扇状地で、谷部から平野に出た部分、すなわち旧河道では上流部に当たる所だと考えられる。

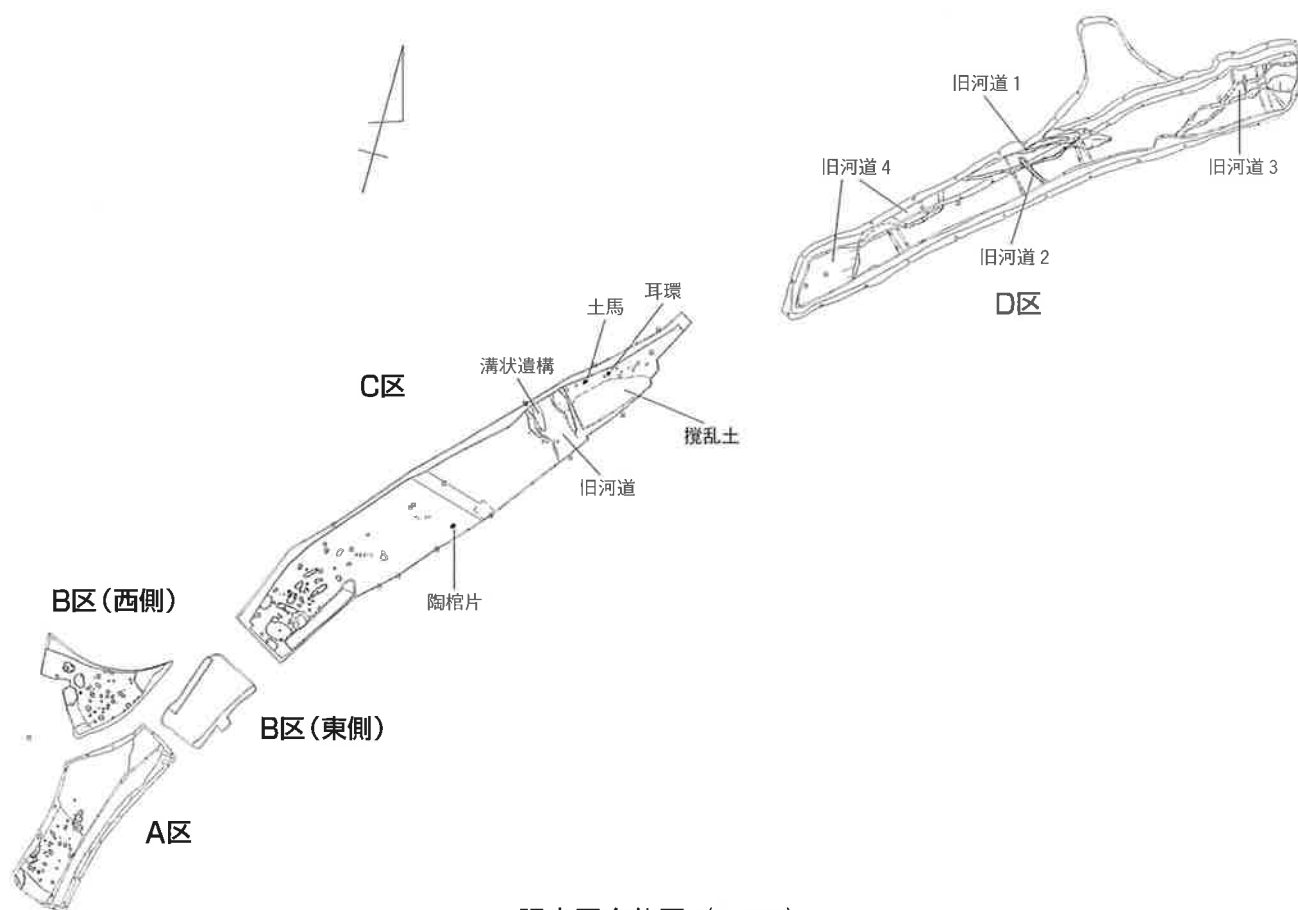
調査区を西から順にA・B（東、西）・C・D区に分けて調査を実施した。

A区からは、土壙2基、数10穴のピットを検出した。これらの遺構内からは、土師器のカマド、土製支脚、須恵器の坏蓋片、高台付の坏など古墳時代中期から奈良時代にかけての遺物が出土した。

B区（東側）は、耕地整理の際削平を受けており遺構は検出されなかった。

B区（西側）からは、数10穴のピットを検出した。これらのピットの基盤層には、古墳時代から奈良時代の遺物を含んでおり、奈良時代以降の遺構であると思われる。

C区からは、ピット群、土壙2基、溝状遺構、旧河道跡を検出した。ピット群、土壙2基からは高坏、坏蓋、甕片など古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての遺物が出土したが、これらの基盤層からは陶磁器片、陶棺片も出土している。この陶棺片は昭和62年度に行われた池ノ奥C遺跡の特殊土



調査区全体図 (1:500)

器（A—1類）の円陶棺の蓋に接合した。

溝状遺構、旧河道跡からは、古墳時代中期の遺物が出土した。旧河道跡の遺物は山陰Ⅰ期の甕など古墳時代中期に限られている事からその頃に埋まったものと考えられる。その他C区からは、中世の須恵器、土馬、耳環などが出土している。

D区からは、旧河道跡を4本検出した。いずれも深さ50cm未満の浅い河道跡であった。これらの河道跡からは古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての遺物が出土した。

今回の調査区は谷部から平野に出た部分の古扇状地で、地山にかかる古扇状地の堆積だと思われる。その堆積土層を削るように河道（網状流路）が形成され、その上にまた土層が堆積したものである。A～C区では多数のピットを検出したが、このような扇状地に一時的な掘立小屋でも建てていたのであろうか？

遺物については、土師器は古墳時代前期からあり、中期の物が大半をしめるが、須恵器は山陰Ⅰ期～奈良、平安時代まであり、山陰Ⅲ期がほとんどで次に奈良時代のものが多かった。これらは本遺跡近くの池ノ奥C・D遺跡、イガラビ遺跡他の遺跡の遺物とほとんど同時期であった。土砂の流出に伴って、周辺の遺跡の遺物が運ばれたものであろう。出土遺物の中には、焼き損じた物、土器と土器が溶着した物、スサの混入した窯壁（窯体）も出土している。今回の調査区の周辺には、池ノ奥、迫谷、寺尾の窯跡が存在するが、より近接した場所に未発見の窯跡が存在するのではなかろうか。

（廣濱 貴子）



D区 旧河道跡

田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する、弥生前期末～中期・古墳前期～奈良・平安時代の遺構が確認された遺跡群である。平成12年度には本遺跡群の主となる弥生前期末～中期の環壕遺跡が国指定遺跡として現状保存されることが決定している。

発掘調査は、平成9年度からはほぼ継続しておこなっており、早くも今年で5年目を迎えることになったものである。

本年度は、本遺跡群南方の南丘陵の西斜面と東斜面について本格調査をおこない、建物跡・石棺墓・遺物が出土する自然流路を検出している。

南丘陵の西斜面

本調査区は、弥生環壕遺跡から南に派生する丘陵の西斜面裾に位置し、斜面が急激に平坦面へと変化する地形を成しているところである。

調査の結果、平坦面で重複する建物跡3棟と柱穴、平坦面から西へ下る斜面でテラス状遺構、西側の平坦面で建物跡1棟と土壙1穴と柱穴を検出した。

重複する建物跡3棟はいずれも溝・壁帯が調査区外である南へ続いており、その全容を明らかにすることはできなかったが、古墳時代後期の土器片が出土していることから、この時期に作られ始めた建物跡と推測されるものである。テラス状遺構は、いわゆるテラス状に加工された平坦面をもつ段状の遺構である。この遺構は、斜面下方に向かって遺構面が流失していたため、その全容は不明ではあったが、埋土中の出土土器から古墳時代後期の遺構である可能性が高いと判断されるものである。西側の平坦面状で検出した建物跡は、溝とこれに平行する柱穴2穴を持つものである。この建物跡の東側は駐車場として削平されており、どのくらいの規模を持つ建物であったのかは不明であった。また、埋土中からの遺物は、土師器・須恵器・中世土器・明治以降の陶磁器が混在して出土しており、その存在時期においても不明であった。土壙及び柱穴は、この建物跡の遺構面と同一基盤から掘られているもので、同状況であったため存在時期等、詳細は不明であった。

南丘陵の東斜面

本調査区は、弥生環壕遺跡から南に派生する丘陵の東斜面に位置し、平成9・12年度において調査したA遺跡の東側の斜面上方にあたる場所である。

調査の結果、重複する建物跡3棟・柱穴・こ炭焼跡1穴・土壙2穴・石棺墓・遺物を含む自然流水路跡2条を検出した。

重複する建物跡は、壁帯溝または溝を伴うもので、平成12年度の調査で検出した掘立柱建物跡と同じ平坦加工面に存在するものである。建物の規模は、東側の遺構面が地滑りによって消失していたため不明ではあるが、平成12年度の調査で確認した掘立柱建物跡と同様な建物跡が存在していたものと推測される。遺物は、甗、土師器片、古墳後期の須恵器の高坏・坏蓋片が出土している。柱穴は、重複する建物跡の西側において4穴検出している。この内3穴は直線状に並ぶものであったが、建物跡となり得るものであるのか、詳細は不明なものであった。こ炭焼跡は、自家消費用の簡素な炭窯とさ

れるもので、古墳時代から近世まで活用されているものである。存在時期は遺物が出土しなかったため不明なものである。石棺墓は、小児用とも思われる小形のもので、尾根の頂部から少し下った斜面上にて石材が露出する状態で確認したものである。単独で存在し、且つ尾根頂部ではなく斜面上に作っている等、不明な点が多いものである。なお、存在時期は遺物が出土しなかったため不明である。自然流水路跡は、調査区中央付近からA遺跡の谷部まで続く、湧水によって作られたものである。この流水路からの遺構は検出していないが、埋土中から弥生前期末～中期初頭の壺・甕片、黒曜石の石鏃、古墳中期の土師器、古墳後期の須恵器、平安時代の甕片が出土している。

まとめ

南丘陵の西斜面の調査では、予想以上の多くの遺構を確認することができたが、遺構面の一部消失や遺構が調査区外へ続いていくことなどから、その全容が掴めなかったことは一部残念な結果であった。しかし、この区域に遺構が存在することが判ったことは、田和山遺跡群の時代ごとの動きを考えるにあたって重要なものとなったと考えられるものである。また、南丘陵の東斜面においては、南丘陵で始めて弥生土器が出土したことが今回の調査において、最大の成果であったものと考えられる。結果的には、これに伴う遺構は確認されなかったが、この土器出土は少なくとも弥生環壕遺跡の最古の段階である弥生前期末に、この南丘陵で人々の動きがあったことが推測されるものである。

(落合 昭久)



田和山遺跡群遺構位置図 (1/2500)